

今週のメニュー

■トピックス

◇10月23日は「化学の日」ってご存知ですか？

一般社団法人 日本化学工業協会 広報部長 鎌田 裕司

■随想

◇カネカロンの用途開発に従事して（第6回）

大原 柊三

■編集後記

■トピックス

◇10月23日は「化学の日」ってご存知ですか？

一般社団法人 日本化学工業協会 広報部長 鎌田 裕司

昨年10月、日本化学会、化学工学会、新化学技術推進協会、日本化学工業協会（日化協）の化学にかかわる産学4団体は、10月23日を「化学の日」、10月23日を含む週（月曜日～日曜日）を「化学週間」に制定しました。

今や、私たちの生活のあらゆる面に化学製品が関わり、安全で、便利で、快適な生活を支えています。また、自動車、ITなどでも化学の材料が使用され、様々な先端技術にも化学が重要な役割を果たし、社会の持続的発展には欠かせないものとなっています。しかし、いずれも素材や部材といった隠れた存在であるために一般の方々にはなかなか化学、化学製品の役割、化学産業の重要性について理解されていないというのが現状です。

「化学の日」、「化学週間」は、「化学をもっと理解してほしい」、「化学にもっと夢をもっと欲しい」との思いを込めてこのような状況を変えていこうとするものです。

では、なぜ10月23日が「化学の日」かといえば、1モルの物質中に存在する粒子の数 6.02×10^{23} に由来しています。化学の授業で教わった方も多い「アボガドロ定数」、この10の23乗に因んでいるのです。

諸外国を見てみると、米国ではすでに20年以上も前に高校の先生や熱心な化学者たちが集まって、National Mole Day Foundation という非営利組織が作られ、10月23日の午前6時02分から午後6時02分までを「Mole Day」（モルの日）と定め、“Mole”の別の意味であるモグラのキャラクターデザインコンテストや高校などの学校で記念パーティーを開くなど大いに盛り上げ楽しんでいます。この活動は、カナダ、オーストラリア、南アフリカといった国々にも広がっているようです。

また、1989年からは米国化学会（ACS）がモルの日を含む一週間を「National Chemistry Week」（化学週間）に制定し、全米各地で実験体験や出前授業といった化学に関連する様々なイベントが行われています。（余談ですが中にはオクトーバーフェストなどのお祭りやゴルフコンペなどに化学週間の冠をつけた催しなどもあり社会や家庭の中に化学が自然に溶け合っているようです。）



朱社長はカネカロンのことは全くご存じでなかった。カネカロン太デニール繊維の特徴とダイネルとの差異をご説明し、カネカロンを使用した輸出用かつらの生産をお願いした。

鹿取氏は直ちに行動され、かつら業界視察に、12月香港、翌年1月台湾を巡回し、香港のR&D社が特に有望であるとの報告を提出された。

19. 1967年1月 R&D社カネカロントウ1.1トン有償購入

R&D社の反応は迅速で、有償でトウ染色品14色、原液染品5色、計1.1トン購入してかつら試作を開始した。

20. 1967年2月28日～3月7日 香港・台北出張

香港・台北のかつら加工業者にトウ購入促進と加工指導のため出張した。ダイネルでかつら輸出を先行されていたR&D社朱社長は今回購入したカネカロンでかつら試作を実施しておられた。その結果、カネカロンのほうがダイネルより色相がよく、ボディウエーブが充分つくことをすでに認識されていた。

その理由を改めて説明し、カネカロンはある種の高分子物質を混合紡糸したので、ダイネルと異なり本質的に表面が粗面になり、適度な光沢と表面摩擦があり適当な繊維のからみも生じ、ウエーブも保たれていることを納得していただいた。勿論ダイネルと異なり、洗濯してもこの性質は変化しないことも付言した。

そこで朱社長は当社の条件でカネカロンを採用することを決断された。契約は4月10日までにカネカ本社で締結することに決まった。なお条件とは年間購入量100トン（初年度60トン）、60トンの場合の価格は原液染6.0ドル/Kg、トウ染7.0ドル/Kg等である。当時1ドル360円の時代である。

21. 1967年7月 R&D社朱社長カネカ大阪本社来社 購入契約成立

遅れたが7月、R&D社朱社長がカネカ大阪本社に来社され、カネカロンを購入する契約が成立した。これが本格的かつら用トウ輸出の始まりであった。丁度欧米でかつらブームが始まりかけた時期であった。

欧米向けかつら用カネカロントウ輸出の目途が得られ、カネカロン事業部における私の仕事・役割はこれで一応完了した。

思えば湯浅氏に面談し、香港のかつら業者紹介をお願いしたことが今回の成果につながったともいえる。

これは第3の僥倖と私は思っている

22. 1967年9月 化成事業部技術室（館室長）勤務

カネカロンの仕事を終えて、心機一転し私は新事業部で発泡樹脂の開発に従事した。

23. 1970年 付記

この年、大阪万博が開催された。カネカロン事業部はかつら事業の利益で積年の赤字を払拭し、なお余りある黒字を出したと聞いた。かつらブームはそろそろ終わりに近づいた頃でもあった。

なお当時のかつらブームの様子はリーダーズダイジェスト1970年3月号41～45頁「男も女もかつら時代」ジーン・リブマン・ブロック著や夕刊フジ1970年10月10日



夕刊フジ1970年10月10日
「七色の髪、全米をかぶる」

“七色の髪、全米をかぶるなどで知ることが出来る。女性のみならず男性も巻き込んで、帽子の様に簡単にかつらを着用して変身を楽しんでいる。カネカロンもダイネルも品不足で、かつらメーカーは割当て分しか入手出来なかった。この中でカネカロンは合成繊維製かつらの60%を占有し健闘している。

(つづく)

⇒ [メルマガ・バックナンバー](#)

■ 編集後記

9月最後の土日に東京ビッグサイトで催された「ツーリズム EXPO ジャパン2014」に初めて行ってきました。これは旅の展示会で、世界各国並びに日本各地の紹介等がなされていました。展示ブースや舞台では各地の音楽や踊りなどが披露され、また飲食コーナーでは各国の料理が供されるなど、旅の雰囲気を楽しむことができます。

意外だったのはアフリカのコーナーの人气が高かったことです。日本人にとってアフリカは遠く、そのためエキゾチックな魅力を感じるせいなのかも知れません。(ヨッシー)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 高橋 満

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp